

スイミングスクール 水着を忘れたら女の子も裸で泳ぎなさい！

優斗君の全裸事件から数週間後、スイミングスクールにはまたもや波乱が訪れていた。

その日のレッスン前、クラスの男の子と女の子たちはプールサイドに集まっていた。

しかし、その中に一人だけ、焦った表情をしている少女がいた。

亜美ちゃんだった。

彼女は水着を入れたはずのバッグの中身を必死に探していた。

「あれ？亜美ちゃん、どうしたの？水着がないの？」

優斗君が心配そうに声をかけた。

「そうなの... どうしよう、水着がないの...」

亜美ちゃんは今にも泣きそうな顔で答えた。

（まさか私が...？）

亜美ちゃんは、自分が水着を忘れるなんて考えられなかった。

いつもしっかりしてい？し、忘れ物なんてほとんどしない。

それなのに、なぜ今日に限って...。

「もしかして、ここ来る前に遊びに行った公園に置いてきちゃったのかな...」

亜美ちゃんは、さっきまで友達と公園で遊んだことを思い出した。

「でも、今から取りに行く時間はないし...」

亜美ちゃんは困った。

その時、クラスを担当する女性コーチ、美咲先生がやってきた。

美咲先生は、スタイル抜群で、子供たちに人気のコーチだ。

「みんな、準備はいいかしら？ 今日はこの前の泳ぎの続きを練習するわよ！」

明るい声で話す美咲先生だが、亜美ちゃんの姿を見ると、表情が陰しくなった。

「亜美ちゃん、あなたは服を着たままプールサイドにいるの？ 水着はどうしたの？」

「...忘れました。」

亜美ちゃんは俯いて答えた。

（まずい、この前の優斗君みたいにさせられるのかな...）

亜美ちゃんはドキドキしていた。

「水着を忘れるなんて、ありえないわ！ この前優斗君があれだけ怒られてたの覚えてないの？」

美咲先生は厳しく叱責した。

「それに、この前優斗君に裸で泳がせた以上、あなただけ特別扱いはできないわ！あなたも裸で泳ぎなさい」

美咲先生は冷たい声で言い放った。

（えっ？ 裸で？ そんな...私女の子なのに...）

亜美ちゃんは驚いて顔を上げた。

「裸で...？ そんな...」

「何を迷っているの？ 早く脱ぎなさい！」

美咲先生は語気を強めた。

「でも...私女の子なのに裸って...」

亜美ちゃんは抵抗したが、美咲先生は許さなかった。

「ダメです。裸で泳ぎなさい。」

クラスの男の子たちも、亜美ちゃんの姿を興味津々に見ている。

特に優斗君は、亜美ちゃんが裸になる姿を想像して、ドキドキしていた。

（亜美ちゃんの裸... どんな感じなんだろう？）

優斗君は、以前の自分と重ねて、亜美ちゃんのことを応援していた。

観念した亜美ちゃんは、恥ずかしさと不安で胸がドキドキしながら、服を脱ぎ始めた。

（ああ、恥ずかしい...）

亜美ちゃんは顔が真っ赤になりながら、Tシャツを脱ぎ、スカートを下ろした。

スカートの下には、可愛らしいブラジャーとショーツが現れた。

クラスの男子たちの目が、亜美ちゃんのブラジャーに釘付けになった。

「うわー... 亜美ちゃんのブラジャー、可愛い...」

そんな声が聞こえてきた。

亜美ちゃんは恥ずかしさで、ますます顔が赤くなった。

(恥ずかしい... 恥ずかしい...)

早くこの場から逃げ出したいと思った。

しかし、美咲先生は、亜美ちゃんを逃がすわけにはいかなかった。

「亜美ちゃん、早く脱ぎなさい。みんなが見てるわよ。」

美咲先生は、意地悪な笑みを浮かべながら言った。

亜美ちゃんは、覚悟を決めて、ブラジャーのホックを外した。